

# わが国の女子ハンドボール競技におけるシュートプレーの問題点とその改善に関する研究：ヨーロッパ強豪国との比較に基づいて

著者	山田 永子
内容記述	筑波大学博士（コーチング学）学位論文・平成23年3月25日授与（甲第5871号）
発行年	2011
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/114391">http://hdl.handle.net/2241/114391</a>

氏 名（本籍）	山 田 永 子（愛 知 県）
学 位 の 種 類	博 士（コーチング学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 5871 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	わが国の女子ハンドボール競技におけるシュートプレーの問題点とその改善に関する研究 －ヨーロッパ強豪国との比較に基づいて－
主 査	筑波大学教授 博士（学術） 山 田 幸 雄
副 査	筑波大学教授 博士（体育科学）中 川 昭
副 査	筑波大学教授 博士（体育科学）朝 岡 正 雄
副 査	筑波大学准教授 博士（工学）小 池 関 也

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### （目的）

ハンドボール日本女子代表チーム（日本女子）には、得点力の欠如という課題があることが長らく指摘されているが、効果的な解決策が未だ現場では示されておらず、研究に関しても現場で役立つ適切な研究がこれまでほとんど行われてこなかった。そこで、本研究ではヨーロッパ強豪国の女子代表チーム（ヨーロッパ女子）と日本女子におけるシュートプレーの違いを明確にし、さらにこのような差異を生じさせていると考えられるユース年代のトレーニングを比較検討することによって、日本女子の得点力向上に役立つ知見を得ることを目的とした。この目的を達成するために、本研究では3つの研究課題を設定し、それぞれの課題解決を図る研究を行った。

### ＜研究 1＞

本研究で設定した第1の研究課題は、ヨーロッパ女子と日本女子の攻撃様相、特にシュートプレーに着目して比較検討を行い、日本女子はヨーロッパ女子に比べて何が劣っていて何が劣っていないかを明らかにすることにあつた。そのために、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて、ヨーロッパ女子と日本女子が直接対戦した8試合における両者のシュートプレー及びヨーロッパ女子同士が対戦した10試合における勝ちチームと負けチームのシュートプレーを分析して比較検討した。その結果として、以下の結論が得られた。

- 1) 運攻のシュート成功率、速攻の生起率及び6mのシュート生起率について日本女子がヨーロッパ女子に比べて有意に低いことは、日本女子の課題というよりも負けチームに表れる特徴の一つである。
- 2) ミドルのシュート成功率について日本女子がヨーロッパ女子に比べて有意に低いことは、負けチームに表れる特徴とは言えず、日本女子の課題と言える。つまり、ヨーロッパ女子に勝つための日本女子の課題は、ミドルエリアのシュート成功率を高めることであり、より具体的には、ミドルエリアのシュート状況に至る過程とその際のシュートの技術達成力の改善である。

### ＜研究 2＞

本研究で設定された第2の研究課題はミドルエリアのシュートプレーに焦点を絞り、まず、ヨーロッパ女

子トップレベルプレーヤーのミドルエリアにおけるシュートプレーの実態を明らかにし、次に、それと照らし合わせながら日本の女子トップレベルプレーヤーのミドルエリアにおけるシュートプレーの問題点を検討することになった。そのために、ミドルエリアのシュート生起率とシュート成功率の高いヨーロッパの女子トップレベルプレーヤー3名と日本の女子トップレベルプレーヤー3名を選出し、計32試合を取り上げ、その中で発揮されたミドルエリアのシュートプレーを記述的に分析した。その結果として、以下の結論が得られた。

- 1) ヨーロッパにおける女子トップレベルプレーヤー3名はそれぞれが個性を活かして様々なシュートプレーを実践していたことから、効果的なシュートプレーには一つの決まった形はないことが認められる。しかしながら、シュート動作やそれに至るまでの動きの中で防御側の予測を困難にさせるような選択肢を持つこと、あるいは、選択肢が限られており防御側の予測が容易であっても防御側に比べ形態面で優位に立つことのどちらかは必要である。
- 2) 日本の女子トッププレーヤーのミドルエリアにおけるシュートプレーは、3名ともシンプルなシュートプレーであることが認められる。日本のプレーヤーの形態面での劣位を考慮すると、シュート動作に至るまでの動きにおいて、助走の方向が偏らない、助走の歩数を減らす、助走スピードを変化させるといった工夫をすること、そしてシュート動作のバリエーションを増やすことが重要な改善点である。

### <研究3>

日本の女子トップレベルプレーヤーがシュート動作に至るまでの動き及びシュート動作のいずれにおいてもバリエーションに乏しくシンプルである原因には、ヨーロッパの強豪国と日本で実施されているシュートのトレーニングに何らかの違いがあることが推察される。そこで、世界のトップレベルにあるヨーロッパ強豪国と日本のユース年代の競技力の高いチームを対象にして、実際に行われているトレーニング、特にシュートに関するトレーニングを比較検討することを第3の研究課題として設定した。そのために、ヨーロッパと日本のそれぞれ3チームを対象にして計18回のトレーニングを実地調査し分析をした。その結果、以下の結論が得られた。

- 1) ヨーロッパのチームでは、防御者の対応、そして局面の前後関係やプレーのプロセスの前後関係の繋がりが考慮されたトレーニングが行われている一方、日本のチームでは技術の習得が目指され、局面及びプレー要素が個別的に取り出されたトレーニングが行われている。

### (結論)

以上を総括すると、日本女子の得点力の向上のためには、ミドルエリアのシュートパフォーマンスを向上させることが重要となり、そして、そのシュートパフォーマンスを向上させるには防御者の対応やプレーのプロセス・局面を考慮しながらシュートプレーの個人戦術を高めるユース年代のトレーニングの工夫をすることが必要不可欠であると結論できる。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、女子ハンドボール競技における日本代表チームとヨーロッパ強豪国代表チームのゲームパフォーマンスを詳細に分析し比較検討する研究を通して日本代表チームの課題を明確にし、併せて、ユース年代のトレーニングに関する調査研究を通して今後の改善のための方向性を示したもので、実践現場へ極めて有益な知見を提示しており、コーチング学分野の博士論文として高い評価を与えることができる。今後、本研究を出発点として、日本代表チームのトレーニングの分析検討や日本代表チーム独自の戦術開発などの研究へ発展していくことが期待される。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。